

る昏れた道端の家の窓にベチカの火はあかあかと燃え、
二重窓のペゴニアの花の紅が目にも痛い。

凍えきつたラーゲルの起居も、それなりに耐えるこ
とのできるようになった一九四七年の冬近く、終わり
に近い船便は我々をカザンに運び、本当のグモイの確
証を乗せて列車はウラル山脈を東に越える。スベルド
ロフスク（エカテリンブルク）の夜の空に生産の火は
赤く、沿線になおラポータの日本兵士もまだ見えるシ
ベリア鉄道をナホトカへ。アクティブのいじめもこら
えて触れる日本海の水は冷たい。

一九四七年（昭和二十二年）十二月、最終のこの年
の帰還船「雲仙丸」は函館に入った。

父亡き故郷の母に、許された字数の電報を打つ。

ミトセヘテ カエルミナトノ ヒサメカナ ブジ
カツシ

シベリア抑留体験記

静岡県 鈴木 伊太郎

明治四十四年三月一日、小笠軍土方村下土方二八六
六番地において出生。大正十五年三月、土方尋常高等
小学校卒業。農業手伝い。家族―父母、兄夫婦、弟、
本人、六人。昭和六年徴兵検査、甲種合格くじのがれ、
第一補充兵となる。昭和八年四月十二日、小笠軍大坂
村三七八一番地、鈴木左次馬の養子となる。昭和十四
年六月十日、満州黒龍江省慶城県華陽開拓団へ入植。

昭和十五年、家族皆渡満、農業を営む。

昭和十九年三月十日、満州戦車七連隊（二三〇四
二）部隊召集、入隊（勃利）。兵器は中位。動員令に
て南方行き、整備を十分にして出動。一部残留となる。
残留兵と転属兵とで戦車三十五連隊（一三〇四二）部
隊編制。戦車は残り物で悪い。整備して使う。兵器は
旧式が多かった。軍服は防寒服まで上等のものがそろ

っていた。隊員はよい兵隊であった。六個中隊そろっていた。兵器は悪かった。勃利より二十年の春、公主嶺へ移動した。

公主嶺において二十年八月九日、空襲警報のサインで知った。連隊長の訓示がすぐ始まった。本日、ソ連が参戦した、戦車三十五連隊は新京警備につけとの命令。直ちに準備、公主嶺より列車輸送とのこと。兵隊はあるべきことが来たのだ。速やかに準備、兵器を公主嶺駅まで送る。その前に弾薬受領、弾薬庫には戦車へ詰め込む弾しかない、補給の予定なしとのこと。三十分撃てば後は弾なし、爆弾抱えて敵の戦車の下へ飛び込むのみ。何とも心細い限り。

準備整い八月十一日公主嶺駅を出発、十三日、新京駅に着く。夜中、列車より戦車、荷物をおろす。直ちに新京警備につく。二、三日でソ連軍と戦うことになるとのこと、身の周りの者は軍隊手帳まで焼け、敵に取られてはならぬとの命令。惜しい物もあつたが、みな焼いてしまった。これで何もかも終わり、生命まで終わりと思つた。子供に会いたいと思つた。何やら

落ち着かない複雑な気持ちで、眠つたのか眠らないのかわからない一夜が明け、いよいよ八月十四日、死が近づくと気が持たない。ばたばたとして一日が過ぎる。

短い夜が明けた。八月十五日、暑い朝だった。中隊長は「連隊本部へ行く。鈴木、中隊長室の留守をせよ」と命じて出かけた。昼食の支度をして、正午間近になつても帰らぬ。一人、中隊長室でラジオを聞いてみると、正午前、突然、重大放送があるのでスイッチを切らずに待てとのこと。困つたな、おれ一人ではと思つているところへ曹長と伍長が入つてきた。重大放送があるとのことだ、聞いてくれと頼む。さて何だろうと言ひ合せていると、玉音放送があるとのこと。陛下のお言葉とは何だろうと、かしこみ聞き始めた。戦争が終わる勅語であつた。なんじら軍人は戦う気持ちには十分あるが、我慢してくれ。お言葉の中に、耐えがたきを耐え、忍びがたきを忍んで国の根本をなくさぬよう、国の礎をつくつてくれと言われたように覚えている。戦いは終わった。気抜けがしてしまつた。みんな、口もきかないぼけの寄り合ひだつた。

外人は威張りはじめて何でも取り上げる、目が離せない。新京市は戦争が終わっても砲声、銃声があちこちです。八月十六日、四中隊は新京駅前広場に集結して、新京警備につくことになった。駅は満州の奥地より引き揚げてくる日本人でごった返している。うちの家族はいないかと気にかかる。市内で時々中国人の小ぜり合いがある。鎮庄のため戦車が出動する。こんな日を何日か過ぎす。八月十九日、原隊へ帰ることになった。

八月二十日、公主嶺の兵舎に入る。その後、ソ連兵の使役に使われる。町の物資を貨車に積み込む仕事。

何もかもシベリアまで送るらしい。十月十二日、列車に乗せられる。帰れることと思ひ、皆大喜びで乗り込んだ。だが、おかしいな、機関車が北向きについている。発車、やっぱり北上。ハルビン回りかなと思つて、みんなもそのつもりでおつた。ハルビンでとまる。右へ曲がると思つておつた。出発、相変わらず北上、皆騒ぎ始める。評定こもごも。あちこちで滞在。十一月二十四日、黒河へ着く。最悪のことになつてしまつた。

いよいよシベリアへ連れていかれるのか、皆、また無言。十二月一日、黒龍江氷結、物資をそりへ積み、渡ることとなる。

十二月二日、ブラゴエシチェンスクよりシベリア鉄道にて北上。全く人間を扱うのではない、家畜より悪い。銃を突きつけ、おどかすのみ。食事はろくな物をくれず、おかずはなし。そして何日か走る。寒さは厳しくなつてきた。氷点下三〇度上下。十二月七日、ナウシキ着、翌八日徒歩にてモンゴル入り。銃でたたかれ、ヴィストラ（早く）と追い立てる。皆やけくそ、動きは遅い。九日、モンゴル・スフバートルに着。滞在。

十七日、自動貨車にてウランバートル着、アングレン収容所に入る。バラック、内外なしの寒い宿舍。こより作業山に石取土をはね掘り出す。高さ一メートル、四メートル四方を五人組で積み上げて終わり。朝から夕方まで休みなし、ようやくでき上がり。冬は伐採、夏はれんがづくり。伐採は長さ二メートルの材木を高さ一メートル、四メートル四方に積み上げる。六

人一組、早朝より休みなし。一日でやつのことで仕上がり。れんがは、山から土を取ってきて練って干し上げ、千二百枚、五人一組で仕上げる。六千枚。いづれの作業もノルマが切れば食事なし。死にもぐるいで働いた。

食事は一日三食の日は少ない。二食か一食。ない日もあった。その日は休み。食べ物なし、休みなしでは苦しいばかりだ。日増しにやせていく。力もなくなる。ノルマは同じ。死ぬ人はふえるのみ。栄養失調で亡くなる人が多い。ウランバートルへ一万五千人収容された。内、二年間で三千人も亡くなっているとのこと。

ウランバートルと山林ウランバートル作業により移動、山林は山小屋のみ。シラミ、南京虫は年じゅうたかりきり、衣服を熱風消毒。入浴は飯盒一杯の湯で全身洗え。タオルをしめせばお湯はなくなる、体ふくのみ。この飯盒を洗わずに飯を盛って食べる。言いたくもない。身体検査なし。三八度の熱があると医者に見せる。軍医は威張りちらして、作業に行けと言うのみ。上官と兵は神とこじきの違いであった。五百人から千

人おった。これが作業、建築、基礎掘り、清掃、れんが焼き、何でもやった。何の作業にもノルマがついていて、終わらなければ罰、食わさない、帰れない。罪人扱い。戦い終わった人間を何でもこんな目に遭わすのかね。朝、スズメの涙ばかりの朝食を済まし、外で言われた仕事につくのみ。労役に何の温かみもなし。労役に耐えられない人も監視兵にけられるのみ。健康の管理など何もなし。朝夕の点呼に長時間立たされた。公主嶺で着服そのまま。

労役の時間、作業内容、仕事量は前に書いたごとく。量ができなければ収容所へ帰さない。帰されても飯なは仕上げさせずにはおかない仕組みだ。一人前の人間にこんなにもひどいことをしられ、やっと復員。函館へ上陸、そのまま、函館国立病院より車で迎えに来てくれて入院。七日ほど飲まず食わず、カンフル注射のみで生きており、やっと気づいた。後、医者が「奇跡だ、何か考えておったか」と。子供、家族の安否であった。「それでよかった、よく死ななんだ」と。